

風水ブーム再考

宮内 貴久*

はじめに

現代の日本では「風水」という言葉は定着し、耳にする機会も増えた。例えば、黄色の財布を持つと金運アップ、ピンクは恋愛力アップになるなど、雑誌やテレビなど各種メディアで耳にする。私たちはいつ頃から、風水という言葉を目にするようになったのだろうか。また、現代日本で語られている風水とは、どのようなものだろうか。

本稿では風水の定義を行った上で、『朝日新聞』の記事を資料にして現代日本の風水の実態について概観した上で、現代日本の風水が、きわめて特殊であることを明らかにしたい。

I. 風水とは？

東洋ではこの世は全て陰と陽のバランスから構成されており、陰と陽は中断なく相互交代しながら活動していると考えられている。

風水とは、土地の気の流れと土地の相（地相）の陰と陽を判断することによって、そこに住む人々に降りかかる災禍を防ぎ、幸福を招こうとする考え方とその実践である。この世は全て陰と陽のバランスから構成されているわけだから、風水における「陰」と「陽」とは、死んだ人間の場である墓である「陰宅」・「陰基」と生きている人間の場である都市・村落・住居である「陽宅」・「陽基」が対象となる。すなわち、良い地相の土地に

バランスよく「家」と「墓」を建設することにより、災禍を防ぎ幸福を呼ぶという考え方である。家だけでなく、墓が重要視される点が特筆される。

II. 新聞記事からみた風水ブーム

1. 風水ブーム前夜

1990年代に日本でも風水ブームが起り、風水という言葉は人口に膾炙していった。しかし、いつ頃から私たちの生活の中に風水が入ってきたのだろうか？

1990年に一冊の本が出版された。渡邊欣雄による『風水思想と東アジア』である[渡邊 1990]。この本が出版されてから民俗学、文化人類学では風水という言葉が知られるようになり、研究分野として注目され始めた。とは言え、1990年代初頭に研究会などで「日本の風水を研究している」と言ってもなかなか理解されなかった。先に紹介したように村田あがが風水ブームを論じたのが1995年、日本建築学会の機関誌『建築雑誌』で「アジアの風水・日本の家相」という特集号が組まれたのが1998年である¹。したがって、1995年前後が風水ブームの一つの起点となると考えられる。

本稿では、朝日新聞社が提供しているデータベース、朝日新聞データベース聞蔵II ビジュアル版により、新聞記事から風水がいつどのように紹介されてきたか、さらに黄色の財布を持つと金運アップ、ピンクは恋愛力アップなど、本来の風水とは異なる現象が生まれてきたのか考察していき、1990年代の風水ブームを再考していきたい²。

*お茶の水女子大学大学院准教授

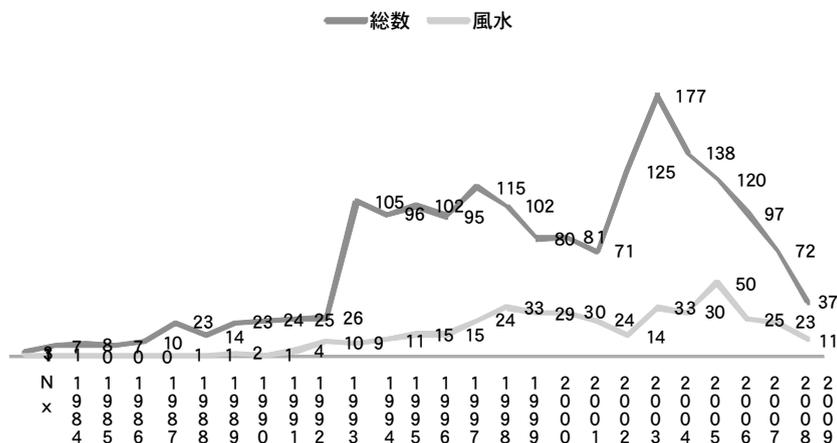


図1 『朝日新聞』「風水」関連記事 注：朝日新聞データベース聞蔵Ⅱビジュアル版から作成

1. 風水ブーム前夜

朝日新聞データベース聞蔵Ⅱビジュアル版で風水という言葉を検索すると、図1のように1984.1.1~2010.6.26の期間で1,784件の記事がヒットする。しかし、その大半は「台風10号による甚大な風水害」あるいは「風水害から都市を守る」など天災である風水害の記事である。1,380件までが風水害の記事である。本稿で対象としている風水に関わる記事は396件に過ぎない。まず、風水ブーム以前の記事から検証していきたい。

朝日新聞紙上で風水という言葉の初出は、1984年12月30日朝刊国際面である。「占いの種類にも、日本の方位占いに似た「風水」から、「鉄板神算」などの古い易学の書に基づく複雑な計算で未来を予言する“理論派”までさまざま。人々は悩みごとと懐具合に応じて占師を選ぶ。(略)香港の位置は風水(方位)の点では大変よい。来年はここを“竜気”が通り、日本、英国、米国へ向かう。だから来年は香港と日英米各国が非常に重要な関係を持つようになる」という内容である。返還後の不安で占い繁盛(書いておきたい話 84:7)」という記事で、香港は風水上いい場所である事、風水占いが流行している事を伝えている。

1985年04月30日朝刊国際面では「カジノはマカオが狙い目? (海外トピックス)」と占いとしての風水が報道されている。

1989年01月09日朝刊読書面では、三浦国雄の『中国人のトポス』が書評で取り上げられている。「中国人のトポス 三浦国雄著 啓発的な宇宙生成論(書評)」という題で、書評では「風水という耳なれないが、風水師なら知っている。荒俣宏原作の映画「帝都物語」では、七つ道具を身につけて路上観察をしながら地脈をさぐり、天変地異の徴候を嗅ぎまわっていた。これは近代のやつし姿で、大地の構造をそこに流れる気の力線においてとらえる風水(術)は、古代中国では宇宙生成論的な科学として、都市建設や神殿宮殿建築の、ひいては家相墓相の、吉凶を占う観相学であった。(下線部論者、以下同様)」とある。ここで紹介されている『帝都物語』は荒俣宏のSF小説で1985年に刊行され、第8回日本SF大賞を受賞し、1988年1月に映画公開され話題となった作品である。注目したいのは、風水がSF小説というサブカルチャーから知られた事、さらに風水ではなく風水師が知られている点である。

1991年08月06日週刊アエラでは、「再見、大英帝国 主役交代中国に返還まであと6年 香港・

安全牌」と香港の風水が紹介される。1993年11月15日夕刊文化面では、「風水の思想が目覚める 沖縄の生活に根付く環境主義（世紀末通信）」という記事で、「風が光り、海が歌う島、沖縄。この島に数百年も前から生きてきた古い知恵が、注目を集めている。十七世紀に中国から伝えられ、南の島々の人々によって受容されてきた沖縄独自の「風水」の知恵がそれだ。」と沖縄には独自の文化である風水が根付いている事、渡邊欣雄らによる全国風水研究者会議が開催される事が伝えられている。興味深いのは風水は環境主義とエコロジーの視点から解釈されている点である。

1995年以前の記事では、風水は香港・マカオという異文化の文脈で報道されている事、沖縄の生活に根付く環境主義という記事からも日本本土にはない文化として捉えており、異文化として捉えられていたと考えられる。また、『帝都物語』というサブカルチャーから知られるようになった。

2. 風水の浸透

1994年夕刊らうんじでは、ポストモダン建築の旗手である磯崎新の特集が組まれている。04月28日の「漢方の話 家相も無視できないと思う（磯崎新の世界：4 語る）」では「磯崎 もっとおもしろい話があります。大昔の中国で生まれた「風水」という説です。」と発言し、さらに磯崎が設計した茨城県水戸市の水戸芸術館が、設計は風水の理にぴったりかっているとポストモダン建築の旗手である磯崎は述べている³。

1993年には風水関係記事が4件しかなかったのが、1994年には10件に急増している。その理由はこの年にNHKで放映されたNHKスペシャル「よみがえる平安京・荒俣宏が探る1200年の謎」という番組関係の記事のせいである。同番組は平安遷都1200年祭を記念して作成された番組で、荒俣宏をナビゲーターにして香港から呼んだ風水師とともに平安京が風水によって建設された都市である事を探っていくという内容である。

同番組放映後、07月02日朝刊社会面に「製作協力の留学生と教授、著作権に抗議 NHK『よみがえる平安京』と著作権に関わるトラブルが発生した⁴。このトラブルは全国版で掲載された後、関西版では継続して報道された。

著作権をめぐるトラブルはともかくとして、この番組は風水が知られる大きな契機となった。これまで、香港・マカオ・沖縄と異文化として捉えられていた風水が、真偽はともかくとして平安京という日本本土を代表する都市計画にも影響を与えていたという番組内容は、風水が異文化ではなく、古代日本本土にも息づいていた文化であるという驚くべき内容だったからである。

こうして風水は『帝都物語』やNHKスペシャルなどの影響で知られるようになった、あるいは目にしたり耳にするようになった言葉となった。しかし、聞いた事はあるが正確に答える事ができない人々も多かったのではないだろうか。1995年03月01日夕刊総合面に「風水信仰く用語」という記事がある。これは風水を簡単に説明した記事であり、読者に基礎知識を与えることを目的としている。つまり、聞いた事はあるが正確に答える事ができない読者のためのものと推察される。また、同日の次の記事を正確に理解してもらうためであろう。

その記事とは夕刊総合面の『「恨」一掃へ国民運動始まる『解放50年』迎える韓国 朝鮮総督府による断脈説』である。これは植民地時代に朝鮮総督府が、朝鮮王朝の弱体化を図るために、気脈が走ると信じられていた岩山の中腹に鉄杭を打ち込んだという、日本では知られていないが韓国では誰もが知っている日帝断脈説を伝える記事である⁵。日帝断脈説には朝鮮王朝の宮殿であった景福院の正面に旧朝鮮総督府が建てられたということでもよく知られている。

1996年10月27日朝刊国際面では、「風水怪談（香港返還 街角）香港風水戦争」という記事がある。中国への返還を間近にして、中国銀行と香港上海

銀行の本社ビルが互いの利益を守るために風水によって設計されたという内容である。

ここまで紹介した記事は平安京、断脈説など都市計画、本社ビルつまり陽宅風水であり、本来の風水に関する記事であった。ところが、1996年を境に風水は本来の内容から拡大していく。

3. 風水の拡大 インテリア、グッズ、黄色

風水が流行しだしたと伝える記事は、1996年11月02日朝刊G K面である。「気の流れ読み、インテリアで運を「風水」日本に上陸か【大阪】」という見出しで、「女性誌やテレビなどで、風水の二文字をよく見かけるようになった。香港や台湾でフィーバーし、韓国でも盛んな風水説が、日本にも本格的に上陸したのだろうか。(中略)風水グッズも出始めた。神戸・三宮の東急ハンズ三宮店ではこの秋、『世間で話題になっているから』と、風水をテーマにしたカレンダーを並べている。風水で開運の色とされる白、黄、ピンクを使っただけのシンプルなものだ。」

この記事によれば風水が流行しだしたのは1996年頃となる。注目したいのは、インテリアと開運の色である。インテリアは陽宅風水のミニマムなものとの解釈すれば、陽宅風水と考える事ができる。しかし、先に指摘したように色と風水は一切無関係である⁶。しかし、色の風水は手軽であるからだろうか、拡大化していく。その中でも特に黄色は金運アップという俗説が流布していく。

黄色い財布が金運アップを伝える初出の記事は、2000年01月05日夕刊社会面の「黄色い財布「幸せ」に心くすぐられ(2000年の自画像：1)」である。同記事によると、「えんぎ屋」は五年前、東京・自由が丘に一号店ができた。黄色の財布は二、三年前からスーパーや百貨店にも浸透し始めた。とのことで、黄色い財布は1997年頃から売られたようである。

黄色はさらに拡大し、黄色ネクタイ(2000年06月18日朝刊鳥取「アイデア競い売り込み きよ

う父の日で百貨店・大型スーパー)、黄色いだるま(2001年12月13日朝刊群馬「ダルマ仕上げに大わらわ 不景気とにらめっこ?」)黄色い招き猫(2002年07月06日夕刊1社会「不況で招き猫の「手」が伸びた 御利益、手広く色多彩に」)など財布、ネクタイ、招き猫と拡大を続ける。

2004年12月18日朝刊群馬では「新年近し、破魔矢ずらり 大間々町の貴船神社」という見出しで、「今年は風水にちなんだ色とりどりの破魔矢が登場。黄色は「金運」、赤色は「幸せ」などと、それぞれ御利益を分けた。神主の奥沢伯久さん(31)によると、色別の矢を昨年初めて用意したところ、黄色の矢が好評だった」とある。破魔弓という呪物にまで色の風水が拡大したのである。

赤色の破魔弓は幸せとあるが、赤色は恋愛力アップとして注目される。2002年12月27日朝刊島根では、「飲んで恋運上昇! 来年から風水赤ワイン発売」と恋愛力をアップする赤ワインが発売されている。

このように色の風水は破魔弓、ワインまで拡大を続けていく。興味深いのは都市部だけでなく、島根、鳥取、群馬など地方でも拡大解釈が続いている点である。雑誌やテレビなど様々なメディアでインテリア、色の風水が喧伝され、人々は幸せを求めて風水グッズに群がっていく。その一方で、そうした状況を冷やかな目で見える者もいた。2003年06月07日朝刊大阪の朝日なにわ柳壇では、「凝る」という題で川柳が募られた。吹田の岩屋美明は次のような川柳を寄せて入賞した。風水に凝って女がまだひとり。

4. 地域の見直し

本来、風水は土地の形状による吉凶判断である事を先述した。風水ブームでも、風水による地域の見直しという動きも見られた。次にそうした風水による地域の見直しの事例を検討していきたい。

割と早い例は茨城県水戸市である。磯崎新の水戸芸術館が風水によって解釈された事を先述した。

1995年05月10日朝刊茨城では、「水戸でしし像の除幕式（香梅）」という記事で次のように報じられている。「水戸市三の丸三丁目のJ R水郡線わきにある市有地で九日、しし像の除幕式があった。市商工会議所や水戸芸術館の関係者が参列、祈ったのは「水戸市の繁栄」だった。きっかけは、芸術館の企画で訪れた中国古代の地理哲学「風水」の研究者による「竜の形をした町なのに、J R水郡線で首が切断されて勢いがなくなった」との診断。中心商店街の地盤沈下など、思い当たるふしがないわけでもない。商工会議所も乗り出し、とりあえず首のキズをふさぐ像の設置に協力した。『新名所になって人を集めてほしい』との期待もかけている。」風水を良くする事により、街の活性化を図るというものである。

地域活性化として風水を取り入れる例としては、2005年07月09日朝刊埼玉の「商店街に若者呼び込もう 旧空き店舗を占いの館に 越谷・大袋」がある。埼玉県越谷市で商店街活性化のために風水など占いの店を出店させたという記事である。

こうした実際的な地域の活性化だけではなく、風水により地域を解釈するという動きも顕著である。

富山県高岡市では荒俣宏を講師に高岡を風水で読み解く講座が開催された（2003年09月30日朝刊富山「インフォメーション／富山 高岡を風水する～荒俣宏が高岡の歴史とミステリーを解き明かす～」）。

静岡県では静岡県立大学の教員による遠州を風水で解釈する講座が開催された（2005年05月07日朝刊静岡全県「週末情報／静岡 ○講座 遠州国学セミナー「古事記と遠州の風水」（浜松市）8日午後2時～4時、東田町の市地域情報センター1階ホール。講師は高木桂蔵・県立大教授。」

荒俣宏、大学教授だけでなく高校生も風水で地域を読み解いている。2008年10月28日 朝刊奈良全県では歴史甲子園の結果が報じられている。『歴史甲子園』優秀賞に5作 奈良大、来月発表

会」というもので、浜田水産高校の生徒2人が島根県浜田市における築城の理由を風水の視点から探り優秀賞を受賞している。」

こうした風水による地域の再解釈は他にも各地で行われたと想像される。また、研究者の中にも目崎茂和〔目崎1998〕、宮本健次〔宮本 2001〕など一次史料を用いずに江戸の風水を解釈する者も出てくるが、全く実証的ではなく思いつきの自己満足的な本で決して学問とは言えない。

以上のような風水による地域の再解釈が、どういった経緯か不詳であるが地域において固定化・伝説化する。次の静岡と山口の記事はその典型的な例である。

2007年02月20日 朝刊 静岡全県

「徳川家康の都市づくり探る 駿府城に入城して四百年 今春から来年にかけて」

「徳川家康が天下人として駿府城に入城した1607年から今年で400年になることから、「大御所家康公駿府城入城四百年祭」（大御所四百年祭）が静岡市と同祭実行委員会の主催で今年春から来年にかけて開催される。（略）四百年祭では家康が風水をもとに静岡の街づくりを行ったとされることから、風水専門家が監修した『風水オリジナル商品』を開発し、会場や市内の協力店で販売する予定だという。」

2008年07月24日 朝刊 山口・2地方

「『風水のまち』山口、歩いてみて コースガイド・お膳掛けできる」

「室町時代の守護大名大内氏は、風水の見地から山口市のまちづくりを行ったと言われている。これにちなみ、JTB協定旅館ホテル連盟山口支部は山口の風水をテーマにした町歩きのコースガイドと、地図を写し込んだお膳（ぜん）掛けを作った。

山口商工会議所や湯田温泉旅館協同組合などと連携して進める『ぶらり山口縦小路』プロジェクトの一環。瑠璃光寺や一の坂川など市中心部と湯

田温泉の観光スポットを地図に盛り込み、市内を巡る5コースを紹介。「大内氏館跡は四神に守られた地に作られたと考えられている」など、風水にちなんだ説明を添えた。コースガイドは2万部、お膳掛けは12万枚作り、旅館や飲食店などに配っている。プロジェクトに携わる商工会議所の河野康志副会頭は『大内氏館跡から五重塔を回り、湯田温泉につかるなど、山口の町歩きを楽しんでほしい』と話している。」

戦国武将である徳川家康、守護大名大内、両名ともそれぞれ静岡、山口の街作りを風水に基づいて行ったとされる。いったい、どのような史料あるいは伝承に基づいているのだろうか。寡聞にしてそうした史料は知らない。また、誰が言い出したのだろうか。山口の場合は商工会議所の河野康志副会頭なのだろうか。この問題については今後の課題としたいが、風水が地方都市の観光資源として利用されているのではないかと考えられる。

5. 墓地風水

風水では陰宅と陽宅、すなわち墓と家屋をバランス良く建てる事が肝要である事を冒頭で述べた。しかし、396件中墓地風水に関する記事は一つもなかった。日本本土では墓地風水は墓相と言われるが、陽宅風水・家相ほど普及していない〔宮内 2009〕。そこで、墓相という言葉で検索すると8件ヒットした。そのうち1件は「墓相談」である。墓相に関する記事は、墓相の相談、墓相の研究などであり、墓を改修して墓相を良くしたという記事は次の1件だけだった。

1986年06月02日 朝刊社会面

「試される自力 同日選で初の評価（検証・中曽根流：5）」

「(略) 翌日昼すぎ、首相は近くの秋川霊園を訪ねた。

5000区画の中央の小高い所に、中曽根家の墓

がある。横10.8メートル、縦5.4メートルに、ツツジが茂り、ベンチ、名刺入れが配されている。真ん中に、黒い小松石の墓石がある。手を合わせに来たのは首相になって3回目。「墓相が悪い」といわれ、総裁選を控えた57年6月、縁起をかついで墓石の下にあった大きな自然石を取り除いた。(略)」

見出しにある中曽根流の中曽根とは、言うまでもなく中曽根康弘元首相である。記事によれば1982（昭和57）年6月、自民党総裁選前に墓相が悪いと言われた墓を改修した。記事にはないが中曽根は総裁選で圧勝し、11月に内閣総理大臣に就任した。そして、中曽根政権は1987（昭和62）年までの長期政権を保った。

つまり、墓相を良くした事により内閣総理大臣のいすを射止めたのである。シンポジウム当日、この話をしたところフロアから失笑が漏れたが、陰宅風水も重視する中国、韓国、台湾、沖縄では全く違う反応が見られたと思われる。陰宅風水が希薄な日本本土こそ東アジアの中では特殊なのである。

おわりに

朝日新聞紙上で風水が取り上げられたのは1984年の香港の記事である。その後の記事もマカオ、沖縄、三浦国雄の『中国人のトポス』と異文化として紹介されてきた。しかし、日本にも風水があった事を紹介したのは1988年に映画公開された荒俣宏の『帝都物語』である。

風水がよく知られるようになった大きな契機は1994年にNHKで放映されたNHKスペシャル「よみがえる平安京・荒俣宏が探る1200年の謎」であった。同番組で平安京は風水によって建設された都市であると喧伝された。その仕掛け人も荒俣宏であった。

風水が流行しだしたのは1996年頃である。流行と共に本来の風水は忘れ去られ、インテリアと色

の風水が拡大していく。特に黄色は金運アップという説が人口に膾炙していく。金運アップの財布やネクタイというグッズ、さらには、だるま・破魔弓・招き猫きなど民俗宗教における呪物にまで拡大していく。

風水ブームの中で、風水による地域の見直し、街おこしという動向も現れる。早い例では1995年の茨城県水戸市であり、その後も各地で風水による地域の解釈が行われ、ついに2007年には戦国武将が風水によって都市計画をしたという伝説が語られるようになり、観光資源として風水が利用されるに至ったのである。

本稿では新聞記事を資料として1990年代の風水ブームを概観し、風水が流行していく過程を明らかにした。しかし、1996年頃からの爆発的な風水ブーム、なぜこれだけ風水が流行したのだろうか。私たちは風水に何を求めたのだろうか。今後の課題としたい。

注

- 1 『建築雑誌』 Vol.113 No.1417 1998年1月
- 2 朝日新聞データベース聞蔵Ⅱビジュアル版は、『朝日新聞』『週刊朝日』『アエラ』に、1984.1.1から現在までに掲載された記事を検索できるデータベースである。
- 3 磯崎は1993年にマカオ沖の海上人口都市、「海市計画」を発表している。その設計計画には気の流れを意図して設計したと述べている。アートプラザ大分磯崎新建築展示室解説。
- 4 大阪大学大学院生の黄永融が博士論文で明らかにした内容を、あたかも荒俣宏が独自に論証したような番組構成になっていたため問題となった。黄の博士論文はその後出版された〔黄 1999〕。
- 5 朝鮮総督府による断脈説については、崔吉城の論考が詳しい〔崔 1999〕。
- 6 五行説の色、青・白・赤・黒・黄から派生したと推察される。しかし、それぞれの色について風水における解釈・説明はない。ピンクは論外である。

文献

崔吉城 1999 「朝鮮総督府庁舎の破壊と「風水」ナシヨナリズム」『日本民俗学』第218号

宮元健次 2001 『江戸の陰陽師－天海のランドスケープデザイナー－』人文書院
宮内貴久 2009 『風水と家相の歴史』吉川弘文館
村田あが 1995 「テーマ書評・風水」『日経アーキテクチュア』1月号 日経BP社
日崎茂和 1998 『図説風水学－中国4000年の知恵を探る－』東京書籍
渡邊欣雄 1990 『風水思想と東アジア』人文書院